

1 単元 おすすめの人物を推薦して、「海の命」の貸出冊数を増加させよう!

2 授業づくりについて

本学級では年間を通して、一人一人が立てた問いを基に文学的文章を読み深めてきたことで、子どもたちの問いに対する必要感が高い。それは、「問いがあることで物語の内容がよくわかる。」「立ち止まってじっくり考えることができる。」という記述に表れている。「帰り道」の学習では「周也と律のどこがすれ違っているのかな」という問いを基に、「私が周也なら絶対に気持ちを伝えられない。」と、登場人物と同化して人物同士の関係性を捉えようとする姿が見られた。また、「やまなし」の学習では「日光の黄金とは、どのような景色なのかな」という問いを基に、「網のようにということは、光がこうやって上から差し込んでいるのではないかな。」と、叙述から受け取ったイメージの違いを体で表現し、自分の読みを形成する姿が見られた。このような姿はまさに、ことばに立ち止まり、自分の読みを形成している姿であるといえる。一方で、人物像を具体的に想像したり、捉え直したりというような読みにはまだ至っていない児童も見られた。

本教材「海の命」は、太一を視点人物として描かれた、海で生きる男たちの物語である。原作「一人の海」を教材化する過程で、多くの描写が省略され、登場人物の言動の理由がほとんど表れていない。それは、亡くなったおとうに対する母や太一の思い、おとうとは違う漁法であるはずの与吉じいさへ弟子入りした太一の思いなどである。しかし、そこに教材としての魅力があるといえる。それは、子どもたちが自由に想像を膨らますことのできる問いが生まれやすいと考えるからである。例えば、「太一はどうして与吉じいさの弟子になったのかな」や「太一の夢とはいったい何なのか」などである。これらの問いに明確な解答があるわけではないが、叙述を関連付けて読むことで自分の読みを形成することは可能である。それは、「おとうと同じ」「父と同じ瀬に」をつなげて読むことで、「おとうにあこがれた太一は、おとうと同じ瀬に釣りに行くと与吉じいさへと弟子入りする。そんなひた向きで意志の強い姿に心がひかれる。」という具合である。このように、問いを解決していく中で、太一やおとう、与吉じいさに対する人物像を具体的に想像したり、捉えなおしたりして変容させていける教材であると考えている。

指導に際しては、子どもたちの対話を促し、人物像を具体的に想像できるように2つの手立てを講じる。1つ目は、「推薦文を書く」という言語活動の設定である。この言語活動には2つの段階がある。まず、「今日の推し」として毎時間の終わりに書き溜めて、推薦するための語彙を獲得したり、書き方を習得したりしていく段階である。初めは内容の理解が浅く、叙述を表面的に引用するような記述が多いだろう。しかし、書き進めていく中で、人物の言動とそこに込められた思いに迫った書きぶりに深まっていくだろう。その後、単元終末に「推薦文を書く」段階を設ける。書き溜めた文章を整理して、改めて推薦したい人物を検討することで、自身の読みの深まりにも気付いていけるはずである。2つ目は、「ロイロノート」の「共有ノート」の活用である。「共有ノート」とは、「ロイロノート」の設定の一つで、同一画面上で同時にやり取りをすることができる機能である。人物像に迫る際に「おとうの死は事故なのか、争った結果なのか。」といった「AかBか」という判断を迫る場面を設定する。そうすることで、自分の考えを明確にし、その理由の違いを交流することで読みが深まると考えるからだ。その際、「共有ノート」で考えを集約し、理由を記述していくことで、他の記述と比較したり参考にしたりしながら人物像を形成していけるのではないかと企図している。

推薦文を書く中で、人物の捉えを変容させ、太一の成長と影響を与えたおとうや与吉じいさの存在にも目を向けて読みを形成していけるような単元にしていきたい。

3 目標

- ・人物像を表す語彙を獲得し、太一やおとう、与吉じいさを推薦する際に用いることができる。
- ・行動描写や心情描写、情景描写をつなげて読む中で、太一の言動の理由について考えたり与吉じいさやおとうとの関係を捉え直したりすることで、人物像を具体的に想像することができる。
- ・人物像を表す語彙を進んで獲得し、仲間と共に海の命の登場人物について読みを深めていく中で、太一やおとう、与吉じいさについて具体的に想像した人物像を推薦文に記述している。

4 学習過程 (全 10 時間)

学習活動	教師の働きかけ	評価の視点となる児童の姿
1次 「海の命」の登場人物と出会おう。		
1) 教師の範読を聞き、登場人物について押さえる。 2) 学習の目的を決め、活動の見通しをもつ。	<ul style="list-style-type: none"> ・範読の合間に語句の意味を確認したり、言動の人物を特定したりすることで、内容の大体を捉え、登場人物に着目できるよう促す。 ・印象深い人物について対話の中で、誰がどうしてどうなった話であるかを簡単に整理する。 ・前時のふり返りを兼ねて感想を共有する中で、「海の命」の面白さや素敵な人物について確認する。 ・図書館にある「海の命」の貸出数が0人であることを知らせ、「一人でもいいから読んでほしい」という気持ちを引き出すことで、「貸出冊数を増やそう」という、目的意識をもたせられるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・母の存在に着目し、「何を感じていたのかな」と、関心をもつことができる。 ・学級文庫からそれぞれが選んだ人物像に合いそうな語彙を見つけている。
2次 人物像を想像して「今日の推し」を書こう。		
3) 本文を通読し、問いを立てる。 4) 語句に着目した問いを解決する。 5) おとうの人物像に迫る問いを解決する。 6) 与吉じいさの人物像に迫る問いを解決する。 7) 太一の夢に迫る問いを解決する。(本時) 8) 海の命についての問いを全体で取り上げて対話する。	<ul style="list-style-type: none"> ・叙述にそれぞれの人物の印をつけながら通読することで、問いを立てる際に、誰の言動なのかを整理できるようにする。 ・叙述を引用した問いだけでなく、「太一はなぜ与吉じいさに弟子入りしたのかな」や「太一はおとうのどのような姿にあこがれていたのかな」といった、人物の関係や人物像に迫る問いを価値づける。「壮大な音楽とは、どのような心境なのだろう?」「海に帰るとはどういう意味だろう?」など、叙述を引用した問いを解決していくことが考えられる。その際、「壮大な」の有無や「行く」と「帰る」の違いなど、比較して思考するように促すことで、人物の心情に気づくことができるようにする。 ・「おとうはなぜ亡くなってしまったのか」という問いについては、漁の仕方についての叙述を見つけるように促したり、「クエと争ったのか、事故なのか」と、判断できるような問い返したりすることで、勇ましく、豪快な姿を想像できるようにする。 ・「太一はどのようにして与吉じいさに弟子入りしたのかな」という問いについては、おとうの漁法と比べるように促したり、「千びきに一びきで…」という言葉を示し、その言葉がない場合と比較するように促したりすることで、与吉じいさの人物像を想像できるようにする。 ・「太一にとって海の命とは何なのだろう」という問いについては、「村一番の漁師」と「本当の村一番の漁師」を比較して読むように促したり、「太一が追い求めていたのはクエなのか、おとうなのか」と、判断するように促したりすることで、太一の父や与吉じいさに対する思いや、頑固で意志の強い一面に気付けるようにする。 ・毎時間の終わりに「今日の推し」として、それぞれが対話した内容について改めて捉え直す機会を設ける。その中で、推薦文を書く経験を重ねていく。その際、「感心しました」「見習いたい」等の、評価語彙や人物像を表す語彙を指導していくことで、終末の推薦文でも用いられるようにしていく。 ・「おとうの死は争って敗れたのか、事故なのか」等の、判断を迫る問いを解決する際は、授業支援ソフト(ロイロノート)の共有ノートを活用し、同時に他者の考えに触れながら思考を深められるようにしておく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・人物の関係性や人物像についての問いが立てられている。 ・比較したり関連付けたりして問いを解決し、それぞれの人物像に迫ることができている。 ・おとうの人物像について自分の読みを形成することができている。 ・与吉じいさの人物像について自分の読みを形成することができている。 ・太一の夢について迫る中で、おとうやクエとの関係についても想像を膨らませて読むことができている。 ・捉えた人物像を基に、題名でもある「海の命」について自分の考えをもっている。
3次 「今日の推し」を整理して、お気に入りの人物を推薦しよう。		
9) 推薦文を記述する。 10) 「推薦文」を交流し、学習のふり返りをする。	<ul style="list-style-type: none"> ・2次で書き溜めてきた「今日の推し」を整理する中で、一番お勧めしたい人物を選ぶように促す。 ・班の中で対話したり、同じおススメの人物同士で交流したりする機会を設けることで、自分の考えを整理できるようにする。 ・チーム内やチーム間で交流し、いろいろな考えに触れられる機会を設けることで自分の記述した考えの良さに気づくことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・推薦文を整理する中で、登場人物の人物像に対する捉えを再考しようとしている。 ・友達の読みと比較して、自分の読みのいいところに気づくことができている。

7 本時の流れ

(1) 目標

漁師としてのおとうへのあこがれと、師匠としての与吉じいさから受けた影響についての叙述を関連付けたり、整理したりして読み、漁師として成長してきた太一の姿を捉えることができる。

(2) 展開

子どもの活動	教師の働きかけ	評価の視点となる子どものあらわれ
1 太一の変化について自分の考えをもつ。	<ul style="list-style-type: none"> 前時までの授業を振り返らせる中で、太一が変化してきたという事実を確認する。それに対して、どのような太一からどのような太一へと変化したのかを一人一人の言葉で記述するように促す。その際、必要に応じて、「初めは～だったが、最後は…」と、変化を捉えられるような言葉を提示する。 	<ul style="list-style-type: none"> 太一の人物像について整理する中で、太一の成長について自分の考えがもてる。
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">太一の成長について対話しよう。</div>		
2 本時の問いを確認する。	<ul style="list-style-type: none"> 太一の成長に迫れるように、「漁師として何が変化したのかな」「何が太一を変化させたのかな」等、班で対話する問いを確認するように促す。 	<ul style="list-style-type: none"> 太一の成長に関する問いを解決しようとしている。
3 チームで問いの解決に向けて対話する。	<ul style="list-style-type: none"> それぞれのチームを観察しながら、「与吉じいさの影響」「おとうへのあこがれ」など、前時までの学習内容を関連付けられるように促す。 	<ul style="list-style-type: none"> 円卓ボードに思考の過程を残しながら太一の成長についての考えを深めている。
4 全体で考えを交流する。	<ul style="list-style-type: none"> 「おとうへの憧れ」や「与吉じいさから受けた影響」などの意見が出てきた際には、根拠となる叙述を押さえながら、丁寧に対話する。 「与吉じいさだけが太一を成長させたのかな？」と、問い返すことで、おとうへの憧れにも目を向けられるようにする。 おとうと与吉じいさのどちらが太一の成長へ強く影響しているかと投げかけることで、幼いころからの夢を追いかけるひた向きの太一の姿と、与吉じいさの教え守り続ける素直な太一の姿を捉えられるようにする。 「瀬の主を殺さないですんだ。」という叙述を提示し、「もし、与吉じいさと出会っていなければ、太一は瀬の主を殺していたと思うか？」と、投げかけることで、与吉じいさから太一が学んだ「海の命を大切に作る心」に気付けるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> 叙述を関連付けたり考えを整理したりして、問いに対する考えがもてている。
5 今日の推しを記述する。	<ul style="list-style-type: none"> 幼いことからひたむきにおとうを追いかけてきた太一のひたむきさと、与吉じいさの教えを守ろうとする素直さに気づき、「今日の推し」に記述しようとしている姿を価値づける。 	<ul style="list-style-type: none"> 人物像を表す語彙や評価語彙を用いて今日の推しを記述できている。